

令和元年度 集落のあり方を考えるシンポジウム「暮らしと誇りの持続」

日時：令和元年10月26日（土）13：00～16：00

会場：北房文化センター ホール（真庭市上水田 3131 番地）

○ 基調講演

「過疎・無居住化の現状と集落維持の手法」

林 直樹氏 金沢大学 人間社会研究域人間科学系 准教授

● 身近な戦略論

・戦略とは、高校生が大学入試を考える場合、志望校に関する方針を決める。など状況に応じてゴールを変えることをあらかじめ考えておくこと。成り行きまかせではない。

● 今回の「撤退の農村戦略」論の目的と基本的な姿勢

- ・目的は無居住化が危惧されるような山間地過疎集落に関する「数十年スケールの生き残り戦略」の構築を考える支援をすること。
- ・大半の方はまだ無関係だと思われるかもしれないが、過疎がだんだん山間地から平地へ降りてきている。

● 基本的な姿勢

- ・厳しい集落のための選択肢を考える。
集落にもいろいろあるので、多様な選択肢を考えることが重要。しかも比較的余力がある集落ではなく、厳しい集落を考える。
- ・集落別の将来については「わからない」と考える。
来年、再来年の話ではなく、何十年も先の話であるので、こうなるに違いないと考えるのは危険。
- ・「減っても大丈夫な姿」を描く。
人が減ったから増やすは基本的なスタンスだが、これからの時代はそれだけでは苦しい。減るのであれば、減っても維持できるような新しい村の形を考えることも必要。
- ・「何が何でも耕地や人工林を守る」から少し距離を置く。
いらぬというのではなく、より選択肢をふやしていくための考え方。
- ・財政の健全化については「別問題」と考える。

● 財政の健全化については「別問題」と考える

- ・過疎地を狙い撃ちにしたような急進的な行政サービスの削減の議論は建設的とは言えない。
- ・山奥の村を切り捨てたくらいでは、あまり関係ない。もっと大きな枠で考えなければいけない。
- ・何十年も先、過疎地と市街地のインフラどっちを先に諦めるかと追い詰められた場合は、間違いなく過疎地からである。

◆ 第1章「議論の準備」

● 山間の小集落の現実とこれから①「不便」「寒い」？

・高齢者に限定した場合の住民の悩みは、①買い物、②通院、③除雪の3つに集約できることが多い。しかし、それなりに健康かつ運転が可能な場合、大多数の人は特段不便ではない。

● 山間の小集落の現実とこれから②「貧しい」？

- ・少し前の感覚で、山奥は貧しいというイメージもあるが、地域別の年間所得でみると農家は貧しくはない。
- **山間の小集落の現実とこれから③「荒れた土地」?**
 - ・荒れた土地とは、都市だと環境破壊のようなイメージだが、使われなくなって雑草・雑木林に覆われた土地のこと。
- **山間の小集落の現実とこれから④無居住化する小集落**
 - ・「山間地」で平成22年以降に無居住化した集落の数は79。そのうち61が「自然消滅」である。
 - ・廃墟だらけの「絵にかいたような廃村」はむしろ珍しく、探そうとしてもない。普通の集落と見分けがつかないのは、住民が通いで手入れを行っているから、または、深いやぶや森林に変化してしまっている。
- **山間の小集落の現実とこれから⑤楽観は禁物**
 - ・ここ何十年で無居住化した集落もまだそんなにあるわけではない。なんとかなるのではないかと思ってしまうが、そこは考えを変えていけないといけない。
 - ・これまでの「恵まれた過疎」から「厳しい過疎」へ。今現在小学校位の子どもは自分の目で人口が半分になるのを目撃することになる。
 - ・国から地方の小さな集落にまでお金が下りて来ていたが、これから急速に人口お減り、補助金なども大幅に減る。
- ◆ **第2章「保険的な選択肢」を考える**
 - ・集落別の将来については「わからない」と考える。個人の場合「わからない」場合に何をするか。保険をかける。
 - ・むらづくりに保険的な発想を導入する。
 - **無居住化保険付きのむらづくり：小松市西俣**
 - ・調査時の定住者は10人と少々。最も若いのは70歳代なかば。
 - ・転出した人々（外部旧住民）が草刈りなどの貴重な戦力になっている。
 - ・村を離れた二世も祭りに参加し、世代的な継承を行っている。
 - ・無住化しても、それなりに維持される可能性が高い。共同体や土地がある程度健在ならば、将来的な再興も可能である。
 - **外部旧住民による土地の管理：地理的な条件**
 - ・田畑などの管理を考慮すると、集落に近いところに住むことが望ましい。小松市西俣の場合は、市街地との距離は車で片道約30分。
 - ・農林水産省のデータを見ると、全国の農業集落の96.4%は市町村役場まで30分未満である。
 - **無居住化保険と活性化は両立可能**
 - ・西俣は無居住化を目指しているということではなく、従来の活性化も実施している。
 - ・責任ある地域住民であれば、無住化保険に入ることによって活性化の手を緩めることはない。これは、責任あるドライバーであれば、自動車保険に入ることによって安全運転の努力を怠ることはないのと同じである。
 - **外部旧住民を長く維持することの難しさ**

- ・離村した人々を「外部旧住民」としてつなぎとめておくことは難しくない。しかし、その子や孫となると容易ではない。
- ・文化的な技術といったような集落の良さを伝える。
- ・帰属意識の維持に資するようなお祭りを実施する。西俣の場合、メインメンバーは屋号の名札を付けている。

● 無住状態だが、田畑が維持されている例：北秋田市（旧）小摩当

- ・1972年に、ふもと跡地に移住。田畑は健在。
- ・通勤耕作も一つの完成形。道路も整備され、通信手段もあることから、耕地から離れて住むことのデメリットが低下して来ている。

◆ 第3章「自由に戦略的に考える」

● 住民属性から見た集落の類型化

- ・外部旧住民：集落外に居住する集落共同体の責任ある一員、原則として縁者。
- ・定住旧住民：集落内に居住する集落共同体の責任ある一員、原則として縁者。
- ・定住新住民：集落内に居住するが、集落共同体の責任ある一員とみられていない人々。

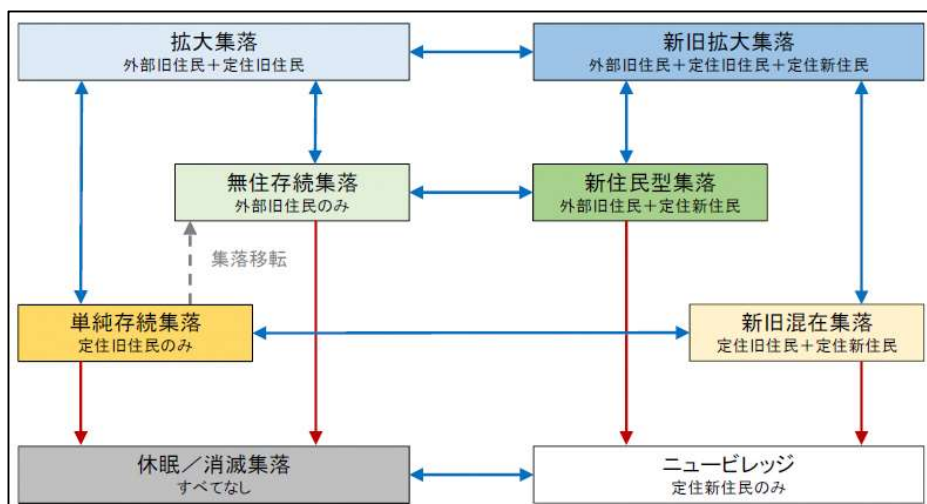
	外部旧住民	定住旧住民	定住新住民
休眠／消滅集落	×	×	×
ニュービレッジ(消滅集落)	×	×	○
単純存続集落	×	○	×
新旧混在集落	×	○	○
無住存続集落: 小摩当	○	×	×
新住民型集落: 芝平	○	×	○
拡大集落: 西俣	○	○	×
新旧拡大集落	○	○	○

● 新住民型集落と思われる事例

- ・芝平（長野市伊那市）は、1978年に集団移転が実施されたが、その一方で、1975年頃から都市住民が転入。2011年、33戸52名。
- ・昔からの住民は住んでおらず、外部旧住民として関わりを持っている。
外部旧住民：○、定住旧住民：×、定住新住民：○

● 集落の変移に関する不可逆性

- ・外部旧住民・定住旧住民の両方がゼロの場合、旧住民を増やすことは難しい。



● 例：バラバラ離村が進む「単純存続集落」①

- ・長期的なむらづくりの場合は、その先になにがあるか、どのような姿が見えるのか、希望はあるのか、危うさは何なのかを意識することが大切。
- ・自分たちの住んでいる集落が単純存続集落だと仮定。このままほっておくと休眠/消滅集落となる。ただし、住民が納得しているのであればこの選択もあり。ただし、せめて記念碑の整備や、歴史を残すなどは実施してほしい。やるべきことはたくさんある。
- ・よくあるパターンとして、都会から若者がカフェを開くというシミュレーション。定住旧住民と定住新住民がいる新旧混在集落。おそらく、この行く先は定住新住民のみのニュービレッジ。カフェができて、定住旧住民の介護や通院などの悩みは解消されるわけでもなく離村していき、最終的にはまったく違う村に置き換わる。納得していれば、これも悪いわけでもない。

● 例：バラバラ離村が進む「単純存続集落」②

- ・東京の若者ではなく、案外近くに住んでいる集落の縁者とのつながりを繋ぎなおすパターン。拡大集落（外部旧住民と定住旧住民）によって維持する。ある意味心の問題であるので、アートや民俗知も力になることができる。
- ・拡大集落の強みは、住民が亡くなってもすぐに休眠集落にならない。外部旧住民が通いで維持する無住存続集落になることである。この状態で勝機を待って、いずれ拡大集落にできればいい。大切なのは前向きな気持ちでいること。
- ・単純存続集落から、無住存続集落へ一気に推移するパターンもある。（小摩当のパターン）
- ・今以外考えてはいけないとか、今の維持こそが絶対の正義であるという考えから少し離れ、いろんな形に変えながら生き残る方法があることを知る。
- ・現状維持以外にはありえないというところから少し距離を置いてみると、まだまだ希望がある選択肢はある。

● 新住民の可能性

- ・新住民が共同体の正式な一員となることも可能。ただし、相互扶助の負担、相互規制から多数は考えにくい。また、この先の土地の継承でも縁者が優先のため不利である。
- ・良い意味で新住民として貢献することも考えるべき。

● ニュービレッジがわるいとはかぎらない

- ・一つの方法としてあり。例として、ロシアのダーチャ村のような形。モノづくりが好きな人が集まり村をひらく。

◆ 第4章「国民全員から必要とされるむら」

- ・村づくりの形は、当事者が納得していればなんでもいいと思うが、せっかくなら、国民に愛される村であってほしい。

● 究極の保険：民俗知

- ・何が国民の宝であるか。山の恵みを持続的に引き出す「文化的な技術」ではないか。万が一の長期的な食糧不足、エネルギー不足に対する備えとみなすことができる。

◆ 第5章「手段としての集落移転」**● 自主再建型移転（集落移転の一種）という選択肢**

- ・集落移転というと、ダム移転と混ぜられてしまうので、過疎緩和のための集落移転を自主再建

型移転とする。

- ・強制移住は考えにくく、住民がとりうる選択肢のひとつ。
- ・雪が少ない地域では、効果はやや限定的である。
- ・過疎地域集落再編整備事業もある。

● 自主再建型移転の誤解：「移住者は悲惨」？

- ・実際に移転された方はどう考えているか。ほぼほぼ移転してよかったと感じている。
- ・良かったとされている点は、買い物や外出など、日常生活が便利になったこと、医療や福祉サービスが受けやすくなったこと、自然災害や積雪への不安が少なくなったことなど。高齢者の悩みに応えられている。
- ・高齢者の多くは今の場所に住み続けたいと思っている。しかし、そうしたいとそうできるは別の問題。健康上の都合で都市部の子供の家や施設に向かうのも珍しくはない。
- ・バラバラの離村は土とのつながりが切れる、地縁が切れるなどの環境の激変を伴うことがあり、必ずしも幸せであるとは限らない。余裕のあるうちにまとまって移転し、コミュニティを維持しながら都市的生活と農村型生活を両立することも一つの選択肢。

● 現代型集落移転の開発

- ・純粋な自主再建型移転は激減。移転に求めるものが大きく変化した可能性が高い。過去は、①子どもの教育環境改善・②通勤環境改善・③買い物や通院の改善の3つの目標があった。しかし、①過疎の村では子どもがいない・②年金生活なので通勤に対してのモチベーションは高くないことから、③だけの問題になり、移転を選ぶことは少なくなった。
- ・除雪や草刈りの負担・自動車運転の安全性・悪化する獣害への対策など、自主再建型移転が不要になることはないとする。
- ・高齢者の生活改善に特化した集落移転手法の開発が必要。

◆ 第6章「動き出した地域住民」

- ・2006年ごろに話をし始めたころは、まだ理解してもらえなかったが、10年前から既存のむらづくりだけではいけないという意識が共有されてきているように感じる。

● 京丹後市の事例

- ・すでに無居住化した集落の現状を調査し、調査結果を土台として、住民ワークショップを開催。無居住化に向き合い、建設的な議論が行われた。

● 長野市の事例：グッドシナリオとバッドシナリオを考えてみる。

- ・明るいイメージ、暗いイメージの両極端になりがち。それはあまり建設的ではない。将来はどうなるかわからないのでみんなでいろいろなシナリオを考えてみる必要がある。

● 集落を消滅させないための問い（地域住民へのメッセージ）

- ・集落の根本的な存続条件は何ですか。
- ・優先順位を考える。諦めるものを間違えなければ集落は消滅しない。
- ・議論を不毛なものにするための6つの方法
 - ①危機を誇張する（不毛）。
 - ②個々の違いを無視して十把一絡げに叫ぶ（不毛）。
 集落の違いは十人十色。個々の違いを無視しない。

③当事者でない人が「良否」の判断を押し付ける（不毛）。

自分たちが納得して選ぶ。

④「will」「can」「we should」を区別しない（不毛）。

こうなるぞ・こう出来る・我々はこうすべきだは別の話。

⑤選択と集中をタブーにする（不毛）。

すべてが悪いわけではない。選択肢からはずしてしまっってはいけない。

農家の農地も、山間部ではなく、平地の農地を選ぶなど、一般的にあること。

⑥未来は一つだけと考える（不毛）。

いろんな状況を想定し、ある程度の備えが必要。

● 「撤退の農村計画」

- ・日本人は撤退が好きではない。しかし、決して後ろ向きではなく、状況が悪いときは少し引いて温存し、勝てるどころが来たら攻めるという意味あいで使用している。

